

書 評

●市村 公一(昭和大学・精神医学)

内科レジデントの鉄則



編集：聖路加国際病院内科
チーフレジデント

B5 頁 244 2006 年
定価 3,780 円(本体 3,600 円+税 5%)
[ISBN 978-4-260-00241-7]医学書院刊

卒後研修必修化を翌年に控えた 2003 年、全国の臨床研修病院を回って研修の実態を調査したが、最初に訪問した聖路加国際病院の印象は非常に鮮烈だった。昼食時のセミナーだけでなく、朝夕の回診でも上級医から研修医に次々と質問が飛び、研修医がポンポン答える。研修医も疑問に思ったことは遠慮なくどんどん質問する。大学病院あたりなら「こんなこと聞いたら叱られるんじゃないだろうか」と躊躇する研修医が普通ではないかと思うが、ここでは知らないことを知らないままにやり過ごすのが最大の罪といわんばかりの雰囲気なのだ。上級医も「後で自分で本を読んでおけ」とは言わない。その場で教える。

全国の 25 の病院を回って、誰が入っても本人の努力の如何にかかわらず一定のレベルの実力をつけさせる研修が、特定の医師の努力によるのではなく、病院のシステムとしてできあがっているのは、ごくわずかな病院しかないと感じたのだが、その最大の秘訣がこうした「耳学問」の徹底にある。それを裏付けるかのように、意外にも聖路加国際病院では研修医控室にごくわずかな本しかな

かった。『ワシントンマニュアル』は指導医の頭の中に全部入っている。研修医は自分で読まなくても指導医に聞けばいい」とは沖縄県立中部病院の元院長で群星沖縄プロジェクトリーダーの宮城征四郎先生の名言だが、繰り返し耳学問で教わり、かつ多くの症例を通じて教わったことを実地に経験を重ねることが、落ちこぼれを作らない研修医の最も肝心な点だと痛感した。

このたび出版されたこの『内科レジデントの鉄則』は、「当直で病棟から呼ばれたら」「内科緊急入院で呼ばれたら」、そして「病棟で困ったら」と研修医が直面する 3 つの状況ごとに発熱や血圧低下、肺炎や脳梗塞、そして輸液や不眠時の対応といった症状・病態にどう対応するかがまとめられている。各項目ごとに忘れてはならないポイントが鉄則として示され、具体的に症例を挙げて Q&A によってその鉄則がなぜ重要なのか、実際にどう考えるのが示されている。この Q&Aこそ、まさに聖路加国際病院の日常の姿であり、臨床研修の要諦だと思う。

聖路加国際病院の、そしてこの本の強みは、卒後 3~4 年目のレジデントが自分たちが 1~2 年目につまづいたポイントを思い出しながら研修医に質問を投げかけられる点にある。その結果この本は、研修医にとってはまず最初にマスターすべき内科研修医のポイント集であり、同時に研修指導にとっては指導のポイントとそのやり方を学ぶ最適なテキストとなっている。

優れた研修病院への第一歩は、指導医が毎朝毎夕研修医の顔を見るたびにこの本の鉄則を質問として投げかけるところから始まるだろう。